

ハ其心満足して之を以て其勞を償ふは足きりとせり

第二十七章

旅客

一日暴風迅雨よて樹木を抜き屋宇を壊らんとせし時一
旅客の雨は濕き泥は汚き飢寒に苦めざる者あり或る村中
第一の人家に到りて請ひ多るハ我が爲めは戸を開き窓
しを垂きて寒を暖むる火と飢を療むる麴包とを賜へと
然るは戸主ハ痛く之を退け我戸ハ漂泊人の爲めは開ら
ざと云ひて速に過ぎ去らしむ旅客ハ又他の門を叩きて
余寒く且飢えたり恵を垂きて爲めは戸を開けと請ひけ
るハ戸主又答て云く汝ハ我家を旅舎とせむや村の端に

行け其處は旅舎あらんと

旅客ハ斯の如く毎戸を叩けども悉く無情として戸を閉
ぢて入きざり多きは最後は甚粗鄙ある一の茅屋に到り
之を叩くは此戸主ハ入り進めよとて速に戸を開き且云
ふ爐上は小枝を投じて火を熾むべし幸に僅の麴包あ
り是ハ眞神の汝に恵む所なり正人よ汝ハ甚疲勞をに見
えたり恐るべき天氣をば爰に暴風雨の止むを待てと
客を延きて爐畔に坐せしめ乾柴數條を火中に投むれば
火炎發揚して旅客ハ大に寒を凌ぐとを得たり

其後主婦ハ旅客の衣を取りて之を乾かし且麴包と牛肉

とを羞めたり是ハ此貧しき村人の所有せる全品を悉く
供せしかり
旅客ハ休息する中雨止み風静まりけきば旅装を修め謝
して云く此地の人ハ皆苛虐殘忍なるこ子獨善良寛仁か
きハ天道必子を賞まべし余復來りて子が其報を受くる
を見んと

明日村中ハ馬嘶き車輾り人の群を行く聲聞ゆる故に諸
人怪しみて家を出で馳せ集り觀きば是ハ國王の來れる
よて其前後ハ數多の騎士排列せり彼の旅客を勸待せし
村人の門前ハ止まり一人微笑して車を下る者あり即ち

國王あり其容儀尊嚴にして仁惠の風あり王の曰く善人
よ今日の王ハ即ち昨日の旅客あり余昨日ハ出獵して途
に迷ひ大に汝の惠を受けたり余之を汝に償ハせんばあ
るべからざ故に今日來りて村の低地ある小き田園を
以て永く汝に有せしめんとぞと

是に於きて此の善慈ある村人ハ驚愕して君恩を拜謝し
彼の無情殘忍ある諸人ハ相顧して羞悔ひ面上に汗を流
し各赧然として其家を退きたり

第二十八章

諸人の必要ある人

エウジエーヌハ其齡十歳として伶俐なる神童あり一日

其父と共に逍遙して野を過ぎ圃人の麥を茹ると耕夫の鋤を以て地を耕すと芻蕘者の枯草を引くとを見又村を過ぎて諸人の各其業を勵むを見る圃地の人口は倉中穀實を打つ者あり穀室ふ之を篩ふ者あり又其家事を掌る婦の牧場は女と呼びて牝牛の乳汁を絞らしむる聲あり

鍛工ハ鉄砧を打ち鉄を竈中ニ焼きて赤くし鋤の尻とふし車の軸とふし鋤又ハ鋌とふし或ハピヲシハ鶴嘴鋤とふ

泥匠ハ屋宇を建築し木匠ハ諸材を製し又鑪を以て鉄を磨して鎖鑰を造る工あり

磨粉車を操る者ハ車ニ囊を當て車輪を水力ハ因りて旋轉し其聲遠く聞ゆ

エウジエーマハ之を見て大ニ感歎して云く嗚呼我真神の妙力人をして各其業を勵ましむ實々人ハ寸陰を愛惜せざんばあるべからず

父ハ此語を聽き顧みて云く信ふ然り然れども猶一事汝が未だ思ひ及ばざる者ありエウジエーマ云く我父よ其事ハ如何父の云く我愛兒よ人若し群を離れて獨居せば甚しき不幸からばや我輩互々相要し互々相爲る事ありて功を易へ智を通ぜざると能ハざればなり汝よく熟視

せよ子泥匠の我屋宇を建築するを要せどや子木匠の我
諸器を造るを要せどや農夫の播種耕藝するハ豈子を養
ふ穀を生ぜるにあらざやその之を收穫するハ又豈子を
養ふ穀を作るにあらざや又磨粉車を操る者麩包を焼く
者熟豆か我食料を製するにあらざらん

汝が衣服ハ汝が自作れるにあらざ剪毛者羊毛を切り製
造者之を羅紗と製せるまで又紡婦ハ耕夫の樹藝せる麻
と亞麻とを紡ぎ之を織工と附して麻布を製せしむ若し
此工人なくんば汝豈麻布を着るとを得んや我愛兒よ汝
よく考へよ人類ハ悉皆一の大親族にして互に相補助す

るのみを豈獨り其一身を以て生を養ふに足らんや故
に余等ハ他人の爲め其業を勵み他人も亦余等が爲め
其業を勉む是故以て人類各其生を遂ることを得るに
り

余輩ハ諸人と連結せる者にして皆互に其業を要し此よ
よりて生を養ひ死に喪ずるとを得るなり

第二十九章 善牧師

村の禮拜堂の傍に幽邃にして素樸なる一小家あり其傍
に小園ありて荆棘の柵を遶らし其内は諸の菓類と二三
株の花卉ありて圃に蔬菜を藝せしむ是ハ牧師の居家

して其窓ハ青色を以て飾り其門戸ハ弓形にして葡萄樹
の蔓纏綿し其景誠ニ閑静なり
汝等悲哀痛心する事あらば此所ニ往きて神を安んじ心を
慰むる言を聞くべし此言ハ天より出づる箴言にして能
く人の心情を開明し汝過失ありて後ニ之を悔悟せば
又此所ニ往きて善き教示を受くべし汝如斯して眞神ニ
和し諸人ニ交ハテ且其身と心と相和同する要を知り得
べし
善牧師ハ性質忠實ふして且親切なり故ニ多く他人の事
を思ひて己が事を思ふ事甚少なく恰も人家の親父の其

家累を處するが如し若し不幸ふして悲哀する者あらば
往きて此牧師を尋ね問ふべし然れども幸福安寧なる者
ハ此牧師を要せざ
若し病む人ある時ハ牧師往きて其臥榻の側ニ坐し其煩
悶の際之ニ氣力を授け且其身をして復び健康と爲す
慈善を爲るとは得しめんとの談話をあむ
衆人ハ唯現在の情願を述べども牧師ハ身後ニ天上へ
生るゝ時の情願を語る此情願ハ永世不朽の希望あり
嗚呼此牧師ハ善良貴重の教職ふしくよく其職を盡しよ
く諸人を愛し且人々相愛する道を教ふる者なり汝之を

敬愛せざんばあるべからざ

第三十章 施濟姑娘

其心淳良端正にして深く眞神を信奉し人の患を憂ひ人の悲を悲し専ら仁惠を事とする婦人あり自云く衆人ハ皆我親族にして余ハ衆人の姉妹あり故に余の衆人を視ると皆我兄弟姉妹を視るが如く是きは余の之を處するも亦兄弟姉妹の如くなり余ハ幼者を保護し之を教科の初步を授け且之を眞神を敬拜せると父母を孝養せべきを教諭す余が病者を看護するハ其臥床の傍に在りて万事に注意

し身体をしつ強壯ならしむべき飲料を持し之を病者の日々に注入し又疵傷ある者には其疵を巻き其創を裹し不幸にして死せんとする者には之を扶持保養す余が斯の如く他人の爲めを意を盡し力を尽すも亦惟余が生涯を送ると彼の善ハ小なりとも勉め之をまべしと云ふ語と我旨と爲るのみならず敢て世人を稱賛せらざんと我望むにあらざると

姑娘よ汝ハ深く眞神を信奉し且仁愛ありて其行事實に感ずるに堪へたきは汝ハ多く衆人の恭敬尊崇を受くべし余此姑娘が貧院の看病人とあるを我見ると甚粗なる毛

織の長き上衣を著且自布の障面を被るのみ其飾ハ斯の如く素樸をきども其身の端良あると其心の正直あると實に其容飾をしつ花麗ならしむ

此姑娘の歩行する或見ると容儀甚謙遜にして己が嘗て看護せし病者と逢へば微笑して立談を故に少年の輩も亦此女を見つ其恙なき或賀して敢て憚り隠るゝ意あることなし

此姑娘一日或る貧家に到るゝ一人の病者ありけきば之は藥劑を與へて其快愈を願はしめ此家を去りて後其喜色ある事恰も善事を爲し時の如し

此姑娘斯の如く善良仁慈あるゝ毎日病床藥爐の間居り呻吟苦痛の聲を聞き垂死病者の側其生涯を過さんとするは果して如何ある意思あるや是き他なく其心至誠惻怛にして人を憐む意深くよく近隣を親愛する情より出て即ち幸福を受くべき生なり如何と云ふは善を爲し仁を樂む人の天必幸福を賜ふが故なり

第三十一章 報讎

或人ソレデリツクム對して怨を抱く者あり余其人の名を指せしを欲せざ其故に悪人の姓名ハ之を忘れん事を要すればなり

此人フレデリックに對して凌轡を極めフレデリックの
所爲を惡く流言し且之を争鬪を挑み百事仇讎の如く
せり

フレデリックは優容して敢て之と拮抗せざる云々彼
れ斯の如く余を仇讎すとも余をして智識才學以て悔ま
ざることを能はざらん夫れ善く余を知らず且余が行事を審ら
ふせん余今彼を報ゆるを怨を以てせしめて徳を以て
せば幸福何ぞ我身を歸せざらん夫れ人惡を人々施して
己が身を富貴せんと欲すとも豈之を得る理あらんや
と

一日此人の兇路上に頓躓して疵傷せり偶フレデリック
此途を過き之を見て直に其兒を兩腕の中へ執りて之を
扶け且云く傷はしき兒よ汝は汝が父の余に於けるが如
き惡怨を他人より受くる事おられと竟之を其家へ送
せり

他日此人の家の一の災厄到りて其畜へたる獸畜悉く病
に罹りて斃れんとを此人大に驚歎をまじりて之を救ふ術
をかくして周章せりフレデリックは禽獸の諸病を治する
秘方を知りたせば直に往きて藥を與へ治療して全く平
愈せり

一日此人驕く峻坂を過ぐるとき其馬忽ち怒りて横走し將之深淵に陥り岩と當りて其身を粉碎せんとせむ勢あり此人恐懼して人色を失し時フレデリック偶此路を過ぎ其景況を見て恰も電光の射るが如く急ぎ走り生を輕んじて其馬を救め遂に此人を救ひたり見る者皆云く善哉フレデリック彼れが其身に禍害をなすを顧みず其危きを見れば徳を以て怨を報へり善哉フレデリック誰か汝を愛せざらん

此人羞耻後悔してフレデリックの家に至り謝して曰くフレデリックよ汝は善人にして余は惡人なり汝今徳を以て余を勝ちたり余實に既往の非を知り汝が大徳を感佩せり今より復汝に禍害をなさざらん

第三十二章 不善の富者

一富豪あり其家華美を窮む從者數人あり日々往來して事を執り家長は専ら奢侈游宴を事とし其食案は列する田圃の蔬果山海の魚肉皆珍膳滋味にして夕々至れば銀燭高く照し滿室光明として車馳せ馬嘶き其景況實に人目を驚かしむ

此富家の比隣に貧者の一草廬あり此家の壞壁敗籬滿目荒涼にして窓は破きたまはば閉づるとも隙ありて風を支

へぞ爐中ハ火已ニ消燼して飢寒并ひ至れり貧者此愁苦
の間ニ隣家ハ游宴方ニ闌として笑語の聲耳ニ徹せり
此時貧者富人の門ニ至りて其身の窮苦を訴へ且其殘酒
餘炙を乞へども家長ハ其言を聽らば僕人ニ命じて嚴々
之を辭せしめ其餽餘ハ皆其畜犬ニ投與せり
然るに此富者ハ數年を経て偶然ニ拙き企望を起し其事
成らばして家を破り産を傾くるに至り彼の金銀を以て
修飾せる居館も責債人の手ニ落ちたり
是に至りて此富者始めて患甚窮困を知り蓋し衆人之
を捨てて顧み親む者なきが故なり

斯くて此富者矮小なる草舎ニ住を其家狹隘にして敗壞
し窓破と柱傾きて風日を拵ハば如此貧困の身とありて
始めて既往の非を知り慙愧後悔し日夜孳々筋骨を勞し
て其業を營み纔に麪包を得て家族と共に安寧和同なる
ことを得たり

第三十三章

自愛して他を愛せざる事

汝等自愛と云ふことを知るや

人あり云く余が幸福は何ぞ他人の事ニ關らん世間の人
各其身の計を爲べし余ハ他人の爲めに分を尽さんとして
世ニ出るとあらば故に他人の運命ニ換へて我身体を替

しめば亦他人の爲めに物を費さんとして世と來るにあら
ざ故に我身の爲めに身体を勞し我身の爲めに志意を盡
して我生を謀り我事を爲ん他人も亦能く自己の事を圖
るべしと

此自愛する人ハ唯其身のみを思ひ己が事該除きてハ別
に思慮を費さざと云ふ其言知るべし其志も亦知るべし
此等の人ハ他人の悲愁哀傷を見ても之を捨つ遠ざけて
其身の困難に至るを避けんとし
若し他人の災厄に罹り或ハ貧困に至る時も自愛する人
ハ其家に坐して敢て之を憂恤救周せざ是れ其有する物

を縦合少しかりとも之を分與せれば其身は損あり且其
貯蓄を減ぜんと恐れてかり

此自愛する人の結尾ハ如何と云ふ事を知るべし是れ他
人を親愛せざるが故に他人も亦之を親愛せざるべし
自愛する人ハ他人を疎遠を他人ハ之を疎遠せざや如何
自愛する人ハ父母もかく兄弟姉妹もかく亦親族朋友も
かし

自愛する人ハ他人を皆暴悪にして且人の恩を忘るる者
かりと云ひ己が暴悪にして人の恩を忘るるを顧みず
殘忍薄情にして己の事を愛する人告ぐ汝ハ人と交り

親む事なく惟一身子然と其生を送る事恰も鳩巢の晝ハ
巢中とありて夜間に出て餌を求むるが如し
汝が家に住むるを見るに賣み彼の醜動物の墻壁孔中に
其身を藏すが如し

汝ハ年老い身衰へて病已と發むる時汝が傍に看護養視
の人なく獨り困苦呻吟して其床頭を憂死をべし

第三十四章

家内

余と共に正しき家族の居住する家へ往きて其家法を見
るべし父ハ野へ出で或ハ家へ居り或ハ庭園を涉り或ハ
器具を造り或ハ手業をなし或ハ商事を經理し常に孳々

として曾て怠ることなし如此其業を營むる惟其一身の
爲めにあらん其側なる妻孥のためにして妻孥を此によ
りて生活を得るなり
妻ハ往來奔走して或ハ竈に火を焚きて食物を調理し或
ハ紡車を轉じ或ハ針工をなし或ハ其兒を養ふに注意し
或ハ兒子の衣服を裁縫し或ハ其傍なる諸物を正整して
清潔ならしむ斯く意を尽さる亦其一身の爲めはあらん
其夫婿と兒子との幸福を要せんとあり
父母如此あるが故に其兒子も亦隨ひて風流あり長男ハ
既に父と共に其業を營みて家事を助け長女ハ針線を執

りて母の業を分ち或ハ稗子以其兩腕中ニ抱けり
小兒の群をあして庭園ニ歩し或ハ田野ニ行くを見よ如
何ニ幼少ありとも皆其小手にて惡草を抜き又其牧の牝
牛諸畜の爲め其食料の草を採集せ此の如く相和同し
各其分の力を盡し其缺を彌縫せり
長らく幼とかく各其職分を盡し各其業を勉め公税を
納れて速く私債を償ひて負ハざるを以て善事とせ是
を各人の勤勞協合して遂に一家族の幸福とせざる非
ぞや家族の善良正直あると其和同親睦あるとの著るま
效あると此の如し故に各人惟其一身の爲め生をなさ

んと思ハズ各相補助戮力して生をなさば豈事を誤る理
あらんや必だ各人相和合して其生を遂げんことを務む
べきなり

第三十五章 老

耆老ハ淳厚にして貴重すべき者あり人あり鶏皮鶴髪ニ
して齡ハ七十五六若くハ八十歳を經ん汝此人を見よ此
人汝が生じし時既ニ老大として汝が生るるを見又汝が
父の生るるを見たり此人の汝等が間ニ在るを森林ニ譬
ふれば一の古櫟樹の衆小樹の中ニあるが如し
此人昔ハ強力雄健ふし額を昂げ頭を直として歩行せ

しが今八年老い力衰へたり然れどもほ才富み智多く
且善良ある教諭あり故に汝此老の許し往け此老必汝に
往時を語り且其經歷實見せし諸業の効驗を説くべし
汝此老者の許し往け有徳の耆老ハ恰も古鼎の賞て含み
く飲物の貴き遺味を永く存して失はざるが如し
有徳の老婦あり子其暮年の安寧あるを見て大に之を恭
敬す此婦に既に其兒子と家事とを措置する事なく兒子
を成長して今既に戸主となりたり然れども老婦となほ
時ありて其子の處に來り其媳婦と女孫とを教誨訓導せ
り

老婦ハ常々其居に退居して優游無事なり是れ眞神の此
婦に積年の勞を賞して其終焉の前之に安息の時を與ふ
るあり
汝等彼の壽考にして久しく世を閑せし人を見れば必立座
して之を敬愛尊崇せし
耆老の居る所ハ少壯の輩ハ總て謹慎畏敬して其言を
聽受せし老者已に耄して其事理の少しく差へるとあ
りとも敢て之を詰難非笑する事なかり其故ハ少壯輩ハ
知識淺薄にして才智ハ多く老者の言はあはれなり
才智の老者在言中存するハ恰も蜜の古木幹にあるが

如し

第三十六章 從僕

耶穌經典中ふ至善なる良誠あり曰く汝ハ汝が從僕汝遇
ざるは慈善故以てせよ是れ汝が主も從僕の主も同じく
天よ在ます眞神よして眞神の人を待てるは固より貴賤
の別を爲ざる故かり夫也汝も汝が從僕との身ハ同じく
眞神の造れる物なあらざれば若し汝從僕を處するは正直
からざれば眞神憤怒して必汝を罰せん汝糾問せらるん
時何を以て之を謝し何を以て之を答ふへしやと
是故に人類の眞神の前ふあるは悉皆平等なるものなり

く尊卑貴賤の階級なく故に主人主婦も亦從僕從婢
も悉皆同一の泥土片個を以て創造せられたる者な
り然らば人類の神前よ在るは悉皆平等なるは塵界人民の
間も貴賤尊卑の差の如き平等ならざることあるは止む
とを得ざる勢なり亦神意に適へりとを雖も之を爲め
る至重不朽なる神前に向ひて人類皆平等なる事を忘る
ることあるを絶えず世に公平ならざる事ありとも此至重不
朽なる神前の平等あるは因りて其事皆消滅せべし故に
汝從僕を待てるは善慈と厚情とを以てし務めて仁愛を

加ふべし又他人の汝は施す所汝が欲する事あらば汝も亦之を從僕に施すべし汝が從僕を處するは眞神の汝に依頼して從僕の身を以て汝に託せるが如くせよ眞神の汝に從僕の身を託すは不幸として困苦せしめんとするにあらざ汝が闕を補ひ汝が勞を助けしめて汝と彼とと多くの幸福を與へんとを欲してなり

若し從僕の過失あらん時汝之を寛宥する意あくんば汝が過失あらん時亦誰ら汝を寛宥する意あらんや又從僕の過失は獨其身の過失よして主家の過失にあらざと思ふか且從僕の過失は汝之を赦さざして汝が過失は汝自

之を赦す權理ありと思ふ

規則と條理とは同一として彼我の間と等差あることなし故に汝他人の汝を恕せん事を欲せば汝も亦他人を恕せざんばあるべからざ

訓勸懲雜話
蒙訓勸懲雜話
石橋好一訂

訓勸懲雜話

和田順吉譯

石橋好一訂

第三十七章 朋友

朋友を人間の最も貴重すべき物にして之を除けば他の
畢生の幸福を輔成すべき者なし故に衆と苦樂を共にし
て己が喜憂之を他人に分ち他人の憂喜之を己に分つべ
し如斯して多く金蘭の交友を得ば其喜實に多かるべし
汝が悲歎の時、當り朋友來りて汝の勇氣を増し又汝を

其兩腕の間を把りて汝と悲哀を俱せせば汝之が爲めに
堪へ易らるべし爰に一個の物ありて之を支持せん二
人なきは軽くして堪へ易く一人なきは其力堪へざらん
又二枝を合さば軟弱なる一枝の如くに容易く折れざる
べし人の朋友と相交り親まばんはあつべらざるに其
理一なり

汝若くハ都街若くハ村落に逍遙して途上汝が朋友に遇
ハハ汝が心和悦し微笑して之を迎へん朋友も亦汝が手
を把りて禮をなし蓋を傾けて語り袂を連れねて歩せば其
悦豈大ならや是れ眞の汝が莫逆の友にして彼の汝が

爲めに意を盡さば汝が悲歎を關せざる漠然たる道路の
人と異なりと云

夜間の寂寥若くハ病中困頓の際に當り眞友の來りて汝
が門を叩き訪ふことあらば汝其聲を聞きて大に汝が意
を慰せん故に眞友ハ實に一の寶庫なり此寶庫ハ滿籬の
黄白ありとも得難き所にして飢寒裘褐の士の却りて得
る所なり汝等之を得んと欲せばや若く得んことを欲
せば惠愛信義を以て人と交らばんハあるべらば
世上に土地を有せんと欲して勉勵經營する人ハ多くあ
るも良友を得んと欲して精思勉勵する人ハ甚少なり

是れ余が解せざる所なり余ハ我家の富貴にして珍玩奇
器の満たんよりハ多く良朋益友を得んことを欲するな
り
余ハ衆人と群衆して一時の喜事の多からんよりハ余と
爐邊に對坐して悲歡を語り窮通を話して余が苦樂に感動
する眞友を愛するなり
或る人一の眞友あり如蘭斷金の交よして休戚悲歡を共
しせり異日此人不幸にして苦況に陥り衆人之を棄てし
顧みる者なき方り此人其友を懐ひ其身を寄せんとし
て之を尋ね行きたり途に其友と逢ひけしハ余今君が

許し行き近況を話して議せんと語るに其友答へて余も
亦往きて君を訪ひ君が身事を圖らんとせしと云へり
第三十八章 恩
人あり常に善長慈惠かる人の少なきを憂ひ世間善心の
者稀なりと云ひ又勉めて善事を爲し及び神意に適へる
正事を他人に施さんとする者も亦稀なりと云ふ是を實
に大なる輕薄の心にして此等の人ハ唯其一身の爲めに
生を盡し何様他人の大惠至愛を受くるとも其恩に感ぜ
ざして猶足らざしと思ひ又他人の爲めし身を勞し志を盡
すを以て徒ら勞を盡すあり

世に善事を爲す者稀ありと云ふと雖も更に稀ある者あり汝之を知らば是を即ち恩義として他人の恩を受けて報ゆるを謂ふあり他人より受けたる恩徳ハ恰も危急止むを得ざる時ハ借り得たる負債の如し豈償ハざるを得んや善人の人ハ恩徳を施すハ耕夫の播種を如く動もせずば忘恩者ありて其施を所空しくかり播種の早燥と遭ひく實らざるが如し是を衆人の恩徳を追懐感荷せざるに因るあり他人の恩を受けて忘るる者ハ誠重任を支ふるが如し之を維持するハ一の難事なり

忘恩とハ如何なる事ぞ即ち他人の恩を受けて之を忘るる事ふて是樹木の食ハれざる苦果を結ぶ或ハ葉をかき小枝を生じて灌漑培養の勞を報ゆるに類せり又凍えて死せんとせる蛇ありて人之を其体の腹部に藏め身を以て之を温めて漸く回生せしめしに却りて其人の心部を噛みて疵傷を人の恩を受けて之を忘るる者ハ豈此蛇と同一あらばや

汝ハ忘恩を戒めて汝の意底に他人より受けたる恩を忘るべき善念を保存せよ動物の微と雖も亦よく恩を感じ愛を知る人として之を

如らざるべけん或人一犬を畜ひとり一日手を以て其犬
を打ちし其犬來りて此手を舐り是れ此手の嘗て已
を愛せしを忘まざる故あり汝之を知らざや

第三十九章

若たるミシエール

家道饒裕として其心善良ある一の富貴の婦あり常々其
近傍の貧人の財貨を周恤する故富めども其家ハ寒素の
如く百事清儉あり衆人之を愛敬して此婦の途を過ぐる
を見れば之を圍繞して其上衣の裾を舐らんとするに至
る我佛朗西國の重大ある禍害を蒙りし時此貴婦の家産
も亦悉く盡し止むことを得ず其城を出でて幽僻の地

に居を占めたり

此婦次第々々落して漸く已が周恤せし貧困人の如く其
窮昔日月と甚しけきは一日悒々として獨枯坐し往を想
ひ來を虞り憂慮する時方り年老いたるミシエールと
云ふ者訪來り是ハ正直なる人として此婦の隆盛ある時
に事へし舊僕あり

ミシエールハ此婦の落魄して昔日の景況と天淵の異を
るを見驚愕悲歎して言ハんと欲する其聲震慄せり此
時ミシエールは財囊を携へて之を机上に投じて曰
く貴婦よ君ふ附すべき者此とあり余久しく之を君不借

り今之を奉還せんとして持ち來りりと貴婦曰くミレエ
ール汝何事を説くぞミレエール答へて曰く貴婦よ余君
の左右に奉事せし時君余を遇はるゝ恵を以てし多く善
徳を我身に蒙らしめ且我兒子を生育せしも亦君の補助
に因り余又家と耕地とを買はんとして其資金乏しく
く焦慮せし時君余が爲め其資を賜はりたり
余ハ君の慈恵よりて小丘に葡萄を藝ふ幸福安寧も晏
然として老を送れり然るも今厄運君が身を通り斯の如
く淪落せり君今何事をか欲する余君の困苦を見るゝ忍
びざ故に我田と我家とを賣りて其得る所の金を君に奉

呈す即ち此財あり余已に老いたきは僅の餘財を得て餘
年を送るゝ足れりと

我兒よ今余汝等と謂ふミレエールハ其嘗て受けたる資
財を以て已に有とせむ舊主と返さるゝハ其身の幸福最も
多く

第四十章 傲慢

傲慢ある人あり自謂ふ余ハ他人よりも貴く他人ハ余よ
りん貴からむと此人自足れりと其身をのゝ尊崇して
他人を賤むとと草芥を見るが如し是れ其心の高慢ある
ことより實に已ハ他人よりも貴き者と思へり

汝も貴も傲慢なる人の情態を知るか是れ氣球の膨脹して昇騰せる者と等しく只其外貌を裝飾して内部は實に空虚なり亦彼の聲と響との如く聞くべくして見るべからざる者なり
余ハ之より反して謙遜辭讓する人を愛む此人ハ常に目卑下して他人を賛揚し敢て己が事を稍道せば其身を戒慎恐懼して敢て人より先だ、ば其言誠實にして虚飾を以て此等の人ハ世の盛譽を得ざとも一個の善者と稱すべきなり
傲慢なる人ハ其身衆より先だち身をたぶり首を昂くし汝

を見るを以て煩勞の堪へざると汝斯の如き人を見れば速に其坐を去れ是を此人の坐す所をけむばなり斯の如き人ハ其身より有ざるものハ惟愚痴と傲慢とのみなり
汝謙遜なる人の來るを見よ勉めて其身をたぶらば又他人の己が爲め其首を低ることと欲せば好みて下位に居り若し之を上坐に延らざれば自其坐に就りて今余汝に説らん謙遜なる人ハ其行事如此卑下まとい雖も傲慢なる人の己の有りて有まと思へる才能知識ハ翻して此謙遜なる人に存せり

此兩人の間ニ差別あり一ハ惟自己の意に於きて賢才六

徳なりと思ふのみ一ハ他人より之を見て眞ニ賢才大徳
かりとせざるなり

第四十一章 各種の職

世上ニ諸種の業ありて或ハ貴く或ハ賤く各人各個ニ其
職ニ居り是れ普通の定法なり
手ニて業以營む工人あり鉄器を鍛造する鍛工あり木を
伐り薪を析く樵夫あり地底の金石を鑿る鑛夫あり又織
工ありて絹布を織造し耕夫ありて穀果を樹藝し多く人
世必用の物を生ぜしめ商賈ありて百貨と食物とを賣買
し之を都鄙各地ニ運送せ

兵卒ありて國家を守禦し牧宰ありて州縣を管治し法官
ありて公裁を掌り功あるを賞し罪あるを罰し至當平均
の事理を以て衆人をして各其所を得しむ故ニ各人亦愛
國の誠意ありて其本國を視察し身を致して保護せんと
欲せざる者なし
人間の通義斯の如し故ニ人各其職務を盡して其生を管
み已め業を捨て他人の業ニ従ふことなれ其故ハ若し
衆人皆農夫とならば誰レ耕耘の器械を鑄造する者あら
ん衆人皆鍛工若くハ木匠とを以て耕耘の夫織紡の工な
き時ハ如何して衣食を得ん法官の公裁を爲す者なく兵